たった一日の病床日記

東京大学大学院学際情報学専攻
安ウンビョル

3月17日。子宮筋腫とポリープの除去手術を受けた。簡単な手術でたった一日の入院だったが、博士論文で心の余裕がなかったことを口実に、ほぼ1年間先延ばしにしていた。しかし体を大事にしろというシグナルか、博士論文審査原稿の提出前日に、びっくりするほどの量の出血があって、急いで再検査を受けて手術を予約した。

日本での入院は初めてだったこともあり、10年前に韓国で入院した時の記憶を思い起こし、色々比較することになった。韓国の大学病院は、賑わう複合施設のような場所で、医師も看護師も皆忙しそうで、患者をかすめていくような感じがある。しかし、今回お世話になった東京郊外の病院は、人が多い時間帯にもなぜかゆったりとしていて、そこで働く人たちは私に最大限注意を払ってくれているように感じた。最近、20年以上日本に在住している韓国人女性が、日本ではすべての病院で断られた手術を韓国の大きな病院に行ってようやく受けることができたという話を聞いたが、その話によると、韓国では経歴を誇示するために手術を重要視し、日本の場合はなるべく手術を避けようとする傾向があるという。日韓の医療現場を比較してみると、韓国は手術を、日本はケアや介護をより重視するという文化的傾向が見つかるかもしれないのでは？

また、問診票に答える時、これまで私が受けてきた健康診断の時に作成されてきたものと「想定されている回答者の身体的状況」があまりにも違うという点に気がついた。普段の痛みや病気の履歴、体に装着している補綴物などをかなり細かい選択肢で問う問診票に答えながら、私は高齢者の日常や速度をほんの少し想像することができた。問診票の質問が場所によってどのように変わるのか比較してみたらどうなるのだろう。

いかなる状況に置かれていても、このように比較文化的レンズを通してその場を観察したり、こんな研究をしてみたらどうだろうか、と思考を巡らせたりするのが、日本に来て大学院で勉強し始めた頃からの癖である。もちろん上記のことのように、だいたい有効な考えには発展せず終わるだけだけど。そして今回の経験と10年前の経験の「違い」の意味は、個人的なものでもあった。そもそも疾患も手術法も違うし、10年も過ぎたから記憶が風化したということはある。けれども2回、手術や入院を「違うもの」として経験したということは、これからの人生において、重要な記憶の糧になるだろう。どんな記憶を残すのか、それでどのように想像するかは、未来に起きることを「対比する」だけではなく、その

経験を作っていく「力」を持つ。

　なかでも麻酔の解け方の違いが、一番記憶に残る。 10年前に全身麻酔が解けた時は、直ちに回復室に運ばれ、何の説明もなく30分間放置された。その時経験した恐ろしい気分と寒さが今回の手術を躊躇させた理由の一つでもあった。しかし、今回は手術後すぐ病室の（一時的だが）自分の「場」に移され、とても穏やかな気持ちでいた。不思議な幸福感と朦朧とした気分、起き上がった時に何を読もうかといったような空想などが混合し、これ以上全身麻酔という言葉自体に怖がる必要はないと思った。

　手術が終わったのは正午だったが、夜眠れないことを憂慮して昼寝はせず、本を読んだりユーチューブ動画を見たりした。いくつか読んだもののなかで一つはジョルジュ・ペレックの『考える/分類する』。ここに収録されている「読むこと－－社会－心理的素描」という文で、ペレックは「読む＜行為＞」を「肉体」と関連させて、また周辺（状況的なもの）と関連させて分類している。後者のものとしては、「間の時間」（何かを待っている間に読む）、「交通手段」、そして「その他」の「病院に入院している時」などという分類がされているが、私の状況はこれが一つにつながっているようだった。夜を待つ長い「間の時間」であり、身体的な不動性によって生まれる長距離飛行のような状況でもあった。退院という目的地に向かって、回復という通路を通る長距離飛行。この時間こそ、「読む」そのものだと思った。実は私は、短い飛行や乗車においても、よく「降りたくない」と思う。目的ではなく、過程が重要だという表現は、私にとってはしばしば、ただの比喩ではなくなる。

　入院中、先日亡くなった大江健三郎が中期に書いた『新しい人よ眼ざめよ』も読んだ。闘病中の「H君」は「僕」に、次のようにいう。
「生きる過程で、他人を傷つける、あるいは他人に傷つけられる、ということがあるね。それをやはり生涯のうちに、貸借なしとする。……　しかし、生きてるうちに精算がつくという問題じゃないね。結局のところ、自分が傷つけた他人には許してもらうしかないし、こちらはもとより他人を許す。そのほかにないのじゃないかと思ってね。……」
この作品で、障害を持った息子がいる「僕」は、生きることの恐怖を克服するために、ブレイクの詩に頼る。「僕」の恐れは、自分の死後に息子のイーヨーが一人で生きていくことである。ブレイクを読むだけでなく、この小説を書くこと自体が「僕」にとって「克服する」旅程であっただろう。もちろん生きることの恐怖は、「生きてるうちに精算がつくという問題じゃない」。しかし、誰かが「言葉」に頼って生きている姿を記録した「言葉」を読んでいる「間」には、勇気と希望とともに歩んでいくことができる。

病棟は静かすぎて私のキーボード音も恐れ多いほどだったが、深夜には生まれたばかりの赤ちゃんの泣

き声が時々聞こえてきた。病院の前には碑石があり、ヨハネ福音書の言葉が刻まれている。私は復活なり、生命なり。